

No.2509

前近代の中東地域における遊牧民と国家

—18世紀初頭、シリア北部へのクルド、テュルクメン定住化政策を中心に—

日本学術振興会 特別研究員PD

岩本佳子

研究目的と活動の概要

オスマン帝国（ca. 1300-1922）において17世紀末から18世紀初頭にかけて行われたテュルク系、クルド系遊牧民のシリア北部への定住化政策が、同地域の社会や自然環境、オスマン帝国、中東地域に与えた影響を解明することを、本研究の目標とする。

2014年8月15日から9月15日にかけて、トルコ共和国イスタンブールの首相府オスマン文書館などで史料調査を行い、財務行政や徴税、定住命令や定住に関して現地から中央政府へ寄せられた嘆願を記録した文書・帳簿類を蒐集し、17-18世紀のテュルク、クルド系遊牧民に対する定住化推進施策の分析を行った。

また、定住化政策の対象となったクルド系遊牧民が現在も多く居住するトルコ東部のエルズルム、ドー・バヤズィト市に残るモスクや墓廟といった史跡、史跡に残る銘文の調査を行った。

研究成果

平成26年度は上記の史料調査の結果、以下の内容を明らかとした。

17世紀末から18世紀初頭に、テュルク、クルド系遊牧民がシリア北部への定住化政策の対象となった背景には、シリア北部地域をめぐる国際情勢の変化の他に遊牧民の夏营地・冬营地間の季節移動を問題視し、遊牧民を定住化させ農耕に従事させることをとするオスマン帝国の遊牧民認識の変化があった。

また、シリア北部地域への定住化政策は、定住先から逃散した遊牧民を再度、以前の定住先と同じ場所に定住することを命令する傾向が強く、遊牧民の逃散と処罰、再度の定住化という悪循環を生み出していた。一方で、シリア北部地域の定住先から逃げ出した遊牧民が、農耕に従事を条件に、逃亡先のアナトリア西部地域での居住を認められる事例も見られ、アナトリア東部から西部への遊牧民の流入とそれに伴う人口や社会の再編が生じていた。

研究成果の公表

本研究課題に関する研究をもとに、京都大学大学院文学研究科に博士号請求論文『前近代オスマン朝における遊牧民の研究——ルメリのユリユク、タタール、征服者の子孫たち、定住化政策の事例から——』を提出した。